



～我が家の豚肉を食卓に届けて～

養豚経営：湯東村大字五ノ上 高嶋 敏子氏

今振り返ると最初の頃は、豚が恐くて恐くて仕事どころではありませんでしたが、いつのまにか二十数年が経とうとしています。

当初は養豚団地として七戸で開始したのですが、何年か経つ内にそれぞれが出荷先も飼料の購入先も別々になり、我が家も新しい仲間と巡り合い、再スタートしたのです。その決まりではそれぞれが法人化することを原則としており、我が家も昭和60年3月15日に(有)高嶋ファームとして船出を致しました。

グループ内では全員が同じ素豚、同じ飼料を使用し出荷先も一緒です。常に、定時・定量・定質を目指し財務内容も農場成績もグループ全員がガラス張りで切磋琢磨して頑張ってきました。

経営を法人化して一番良かったことは、経費が家計とハッキリ分離できたことです。自分の意識の中でも生活費、子供の学費、諸々の養豚経営に関係の無い支出は一切、主人と私の給料から賄い、交際費等も養豚関係か個人的支出をはっきり区分すると言う「当たり前」が自然に身に着いてとっても良かったと思っております。また、今から五年ほど前になりますが「生産直売」で豚の串焼きを売りたいと主人から相談されました。

「お客様相手の商売なんて経験も無いし、とてもできない」と反対しましたが、主人がどんどん話を進めて行き、結局、土、日、祭日に販売することになりました。開始当初は勝手が判らず大変でしたが、子供達も学校が休みの時は交代で協力してくれ助かりました。それがきっかけで村の夏祭りや、近隣の色々なイベントに声を掛けてもらい直売しています。

二年前には、巻町に小さな直売所を開設し夕方だけ「持ち帰り専門」店で直売をしています。お客様に直に接して、私達が実際に養豚をやっていると言うと大抵の人はびっくりしますが「じゃあ安心ですね」と言う言葉が返ってきます。

「生産」と「直売」と言う二足のわらじを履いてから特にイベント等に行く時は、豚舎の仕事を早く済ませ、帰って来てからまた豚舎仕事と大変忙しいですが「美味しかったよ」と言うお客様の声を直接耳にすると、養豚経営をやって良かったなと嬉しくなって明日の励みになり頑張れます。

～食肉の安全性を 再認識して～



肉用牛経営：

黒川村大字下江端 河内 松雄氏

稲穂も黄色く色づき、山里も実りの秋を迎えました。気ぜわしく行き交う農家の人の顔にも、取り入れの喜びが伝わってきます。私も農業を始めて35年、畜産(和牛肥育)を始めて30年になろうとしています。

この間色々な事がありました。ドルショックによる牛肉価格の暴落、O157、口蹄疫の発生など、その都度全力でなんとか乗り切ってきました。やっと自分の経営の形ができた昨年の9月11日、世界の人々の目が、アメリカの世界貿易センタービルの爆破テロのニュースにくぎ付けになっていたその日に、国内で最初のBSEが発生しました。

各マスコミはテロと同じ位に、毎日のように報道を続け、不安から消費者の牛肉離れが続くスーパーの食品売り場から牛肉が消えた事もありました。

「私達畜産農家は何か悪い事でもしたのだろうか?」と自問自答の毎日が続き、経済的にも、精神的にも耐えがたいダメージを受けたのは、私だけでは無かったと思います。「もし、自分の農場でBSEが発生したら今までの全てを失う事になる。」このような言いようの無い不安があの日以来消え去ることがありません。

発生直後から、国、県を始めとして関係機関において、色々な対策がなされた事により一時混乱した状況は、少しずつ改善され一年経過した現在、やっと落ち着きを取り戻しつつ有るように思います。

「食」への安全、安心に対する消費者の関心は高まり、生産者サイドへの要望・要求も一段と強くなって来ております。私達生産者も、自らの責任の重さを再認識することが必要だと思っております。

全頭BSEの検査の実施、全頭耳標の装着、トレーサビリティの実施、情報の全面開示等これらを踏まえ、全国的な牛肉の安全生産、流通体系を構築することが早急に望まれているものと思います。